

2016 年度 応用複素関数 期末試験問題

2016 年 7 月 27 日 (水曜)5 限 16:00~17:00 施行, 担当 桂田 祐史
ノート等持ち込み禁止, 解答用紙のみ提出

1 は必修問題であり、必ず解答すること。それ以外の 2~8 (配点はどれも同じ) から 2 問選択して解答せよ。

1. 数値積分の DE 公式について説明せよ (目的、公式、公式がどのように導かれたか、他の数値積分公式との比較、特徴、プログラムの書き方などを書くこと)。

2. $P(z), Q(z) \in \mathbb{C}[z]$, $f(z) = \frac{Q(z)}{P(z)}$, $\deg P(z) \geq \deg Q(z) + 2$, $P(x) \neq 0$ ($x \in [0, \infty)$) とするとき、 $I = \int_0^\infty f(x) dx$ を留数を用いて計算する公式を求めよ (単に公式を書くだけでなく、証明すること)。

3. $P(z), Q(z) \in \mathbb{C}[z]$, $f(z) = \frac{Q(z)}{P(z)}$, $\deg P(z) \geq \deg Q(z) + 1$, $P(n) \neq 0$ ($n \in \mathbb{Z}$), $s(z) = \frac{\pi \cos \pi z}{\sin \pi z}$ とするとき、 $\sum_{n=-\infty}^{\infty} f(n) = - \sum_{c \text{ は } f \text{ の極}} \text{Res}(f(z)s(z); c)$ が成り立つことを示せ。ただし、任意の $N \in \mathbb{N}$ に対して、 $z \in \mathbb{C}$ が $|\text{Im } z| = N + 1/2$ または $|\text{Re } z| = N + 1/2$ を満たすならば $|s(z)| \leq 2\pi$ であることは証明せずに用いて良い。

4. 次のうちいずれか一方を選んで解け。(1) $S = \sum_{n=1}^{\infty} \frac{1}{n^2 + 1}$ を求めよ。(2) $S = \int_0^\infty \frac{dx}{x^3 + 1}$ を求めよ。

5. 複素平面内の実軸上の有界閉区間 $[a, b]$ を含む開集合 D で正則な関数 $f: D \rightarrow \mathbb{C}$ に対し、 $[a, b]$ 上の定積分 $I = \int_a^b f(x) dx$ を、積分公式 $I_n = \sum_{k=1}^n f(x_k) A_k$ (x_k, A_k については、授業で説明した仮定を満たすとす) で計算する場合の誤差解析について、以下の問に答えよ。

適当な閉曲線 C 、適当な関数 Φ と Λ_n に対して、

$$(\#) \quad I = \frac{1}{2\pi i} \int_C \Phi(z) f(z) dz, \quad I_n = \frac{1}{2\pi i} \int_C \Lambda_n(z) f(z) dz$$

が成り立つことを授業で紹介した。 C, Φ, Λ_n はどのようなものか書け (関数については、どの領域で正則か述べること)。また (#) が成り立つことを証明せよ。

6. 流体力学における連続の方程式を適当な仮定から導出せよ。

7. (1) 流体力学における Lagrange 微分 (物質微分) について説明せよ。(2) Euler 方程式, Navier-Stokes 方程式を書け。(3) 静止している池の水圧がどのようになるか、一様な重力場を仮定して、Navier-Stokes 方程式を解いて説明せよ。

8. (1) 流体力学における次の用語の定義を述べよ。

(a) 非圧縮 (b) 渦なし (c) 速度ポテンシャル (d) 流線 (e) (2次元流体における) 流れ関数

(2) 次のことを示せ。(a) 流体が渦なしならば、単連結領域内で速度ポテンシャルが存在する。(b) 2次元流体が非圧縮ならば、単連結領域内で流れ関数が存在する。

(3) 複素速度ポテンシャルについて説明し、流線と等ポテンシャル線の関係について述べよ。

1. (1) DE 公式 (double exponential formula) とは、数値積分のための公式である。数値積分とは、定積分の値を数値計算で求めるための方法のことをいう。

もっとも基本的な DE 公式は、定積分 $I = \int_{-1}^1 f(x) dx$ に対して

$$I_{h,N} := h \sum_{n=-N}^{n=N} f(\varphi(nh)) \varphi'(nh)$$

を近似値に採用するものである。ここで $h > 0$, $N \in \mathbb{N}$, $\varphi(t) = \tanh\left(\frac{\pi}{2} \sinh t\right)$.

$x = \varphi(t)$ ($t \in \mathbb{R}$) という変数変換を行うと、 $dx = \varphi'(t)dt$, $t \rightarrow -\infty$ のとき $x \rightarrow -1$, $t \rightarrow \infty$ のとき $x \rightarrow 1$ であるから、 $I = \int_{-\infty}^{\infty} f(\varphi(t)) \varphi'(t) dt$ が成り立つ。 $F(t) := f(\varphi(t)) \varphi'(t)$ とおくと、

$$I = \int_{-\infty}^{\infty} F(t) dt.$$

一般に \mathbb{R} で滑らかな関数 F の定積分 $I := \int_{-\infty}^{\infty} F(t) dt$ に対して、台形公式 $I_h = h \sum_{n=-\infty}^{\infty} F(nh)$ (ここで h は、 $h > 0$ を満たす定数) はしばしば非常に高精度な近似値となることが知られている。

実際の数値計算では、無限和の計算は難しい場合が多いので、有限項で打ち切った

$$I_{N,h} := h \sum_{n=-N}^N F(nh)$$

で近似することになる。

$t \rightarrow \pm\infty$ のときの $F(t)$ の減衰が速ければ、 $|I_{N,h} - I_h|$ は小さいことが期待できるので、

$$|I - I_{N,h}| \leq |I - I_h| + |I_h - I_{N,h}|$$

から、 $I_{N,h}$ は I の良い近似になることが期待できる。

実際、DE 公式の誤差は適当な条件下で指数関数的に減少する。また端点において特異性がある場合 (例えば $\alpha, \beta \in (0, 1)$ の場合の $\int_0^1 x^{\alpha-1}(1-x)^{\beta-1} dx$ など) にも適用できることがある。

2. 4月13日に講義した。

命題 0.1 $f(x) = \frac{Q(x)}{P(x)}$, ここで $P(z), Q(z) \in \mathbb{C}[z]$, $\deg P(z) \geq \deg Q(z) + 2$, ($\forall x \in [0, \infty)$) $P(x) \neq 0$ が成り立つとする。このとき

$$(1) \quad \int_0^{\infty} f(x) dx = - \sum_{c \in \mathbb{C} \setminus [0, \infty)} \text{Res}(f(z) \log z; c).$$

ただし \log の値は、虚部が $(0, 2\pi)$ の範囲にあるように定める。

$$C_1: z = te^{i\delta} \quad (\varepsilon \leq t \leq R),$$

$$C_2: z = Re^{i\theta} \quad (\delta \leq \theta \leq 2\pi - \delta),$$

$$-C_3: z = te^{i(2\pi-\delta)} \quad (\varepsilon \leq t \leq R),$$

$$-C_4: z = \varepsilon e^{i\theta} \quad (\delta \leq \theta \leq 2\pi - \delta).$$

$$\int_{C_1+C_2+C_3+C_4} f(x) \log z dz = 2\pi i \sum_{c \in \mathbb{C} \setminus [0, \infty)} \text{Res}(f(z) \log z; c).$$

$$\begin{aligned} \int_{C_1} f(z) \log z \, dz &\rightarrow \int_{\varepsilon}^R f(x) \log x \, dx, \\ \int_{C_3} f(z) \log z \, dz &\rightarrow - \int_{\varepsilon}^R f(x) (\log x + 2\pi i) \, dx, \\ \int_{C_2} f(z) \log z \, dz &\rightarrow \int_0^{2\pi} f(Re^{i\theta}) (\log R + i\theta) \cdot iRe^{i\theta} d\theta, \\ \int_{C_4} f(z) \log z \, dz &\rightarrow - \int_0^{2\pi} f(\varepsilon e^{i\theta}) (\log \varepsilon + i\theta) \cdot i\varepsilon e^{i\theta} d\theta. \end{aligned}$$

最初の2つから、 $\delta \rightarrow 0$ とするとき

$$\int_{C_1} f(z) \log z \, dz + \int_{C_3} f(z) \log z \, dz \rightarrow -2\pi i \int_{\varepsilon}^R f(x) \, dx.$$

実数 M が存在して、十分大きい任意の R に対して、 $|f(Re^{i\theta})| \leq \frac{M}{R^2}$ であるから、 $R \rightarrow \infty$ とするとき、

$$\left| \int_0^{2\pi} f(Re^{i\theta}) (\log R + i\theta) \cdot iRe^{i\theta} d\theta \right| \leq \frac{M}{R^2} (|\log R| + |2\pi i|) R \int_0^{2\pi} d\theta = 2\pi M \frac{\log R + 2\pi}{R} \rightarrow 0.$$

実数 M' が存在して、十分小さい任意の ε に対して、 $|f(\varepsilon e^{i\theta})| \leq M'$ であるから、 $\varepsilon \rightarrow 0$ とするとき、

$$\left| - \int_0^{2\pi} f(\varepsilon e^{i\theta}) (\log \varepsilon + i\theta) \cdot i\varepsilon e^{i\theta} d\theta \right| \leq M' (|\log \varepsilon| + |2\pi i|) \varepsilon \int_0^{2\pi} d\theta = 2\pi M' (|\log \varepsilon| + 2\pi) \varepsilon \rightarrow 0.$$

まとめると、 $\varepsilon \rightarrow 0, R \rightarrow \infty$ とするとき、

$$-2\pi i \int_0^{\infty} f(x) \, dx = 2\pi i \sum_{c \in \mathbb{C} \setminus [0, \infty)} \text{Res}(f(z) \log z; c).$$

$-2\pi i$ で割り算して、結果を得る。 ■

3. これも授業でやった。

命題 0.2 $P(z), Q(z) \in \mathbb{C}[z], \deg P(z) \geq \deg Q(z) + 2, (\forall n \in \mathbb{Z}) P(n) \neq 0, f(z) = \frac{Q(z)}{P(z)}$ とするとき、

$$\begin{aligned} \sum_{n=-\infty}^{\infty} f(n) &= - \sum_{c \text{ は } f \text{ の極}} \text{Res}(f(z)s_2(z); c), \\ \sum_{n=-\infty}^{\infty} (-1)^n f(n) &= - \sum_{c \text{ は } f \text{ の極}} \text{Res}(f(z)s_1(z); c). \end{aligned}$$

ただし $s_1(z) = \frac{\pi}{\sin \pi z}, s_2(z) = \frac{\pi \cos \pi z}{\sin \pi z}$.

証明 任意の自然数 N に対して、 Γ_N を前項の閉曲線とする。 f の極 c が Γ_N 上になければ (N が十分大きければこれは成り立つ)、留数定理より、 $j = 1, 2$ について

$$(2) \quad \int_{\Gamma_N} f(z)s_j(z) \, dz = 2\pi i \sum_{k=-N}^N \text{Res}(f(z)s_j(z); k) + 2\pi i \sum_{\substack{c \text{ は } f \text{ の極のうち} \\ c \text{ は } \Gamma_N \text{ の内部}}} \text{Res}(f(z)s_j(z); c).$$

$N \rightarrow \infty$ のとき、左辺の積分は 0 に収束する。実際、ある定数 C が存在して、十分大きい任意の N に対して、 $|f(z)| \leq \frac{C}{N^2} (z \in \Gamma_N^*)$ となるので、

$$\left| \int_{\Gamma_N} f(z)s_j(z) \, dz \right| \leq \max_{z \in \Gamma_N^*} |f(z)s_j(z)| \cdot (\Gamma_N \text{ の長さ}) \leq \frac{C}{N^2} \cdot 2\pi \cdot 4(2N+1) \rightarrow 0.$$

一方、

$$\begin{aligned}\operatorname{Res}(f(z)s_1(z); k) &= f(k) \operatorname{Res}(s_1; k) = f(k) \cdot (-1)^k = (-1)^k f(k), \\ \operatorname{Res}(f(z)s_2(z); k) &= f(k) \operatorname{Res}(s_2; k) = f(k) \cdot 1 = f(k)\end{aligned}$$

が分かるので、

$$\begin{aligned}\sum_{k=-N}^N f(k) &= - \sum_{\substack{c \text{ は } f \text{ の極のうち} \\ c \text{ は } \Gamma_N \text{ の内部}}} \operatorname{Res}(f(z)s_2(z); c) + \frac{1}{2\pi i} \int_{\Gamma_N} f(z)s_2(z) dz, \\ \sum_{k=-N}^N (-1)^k f(k) &= - \sum_{\substack{c \text{ は } f \text{ の極のうち} \\ c \text{ は } \Gamma_N \text{ の内部}}} \operatorname{Res}(f(z)s_1(z); c) + \frac{1}{2\pi i} \int_{\Gamma_N} f(z)s_1(z) dz.\end{aligned}$$

$N \rightarrow \infty$ とすると

$$\begin{aligned}\sum_{n=-\infty}^{\infty} f(n) &= - \sum_{c \text{ は } f \text{ の極}} \operatorname{Res}(f(z)s_2(z); c), \\ \sum_{n=-\infty}^{\infty} (-1)^n f(n) &= - \sum_{c \text{ は } f \text{ の極}} \operatorname{Res}(f(z)s_1(z); c). \blacksquare\end{aligned}$$

$$(3) \quad s_1(z) := \frac{\pi}{\sin \pi z} \quad (\pi \operatorname{cosec} \pi z \text{ とも書かれる}),$$

$$(4) \quad s_2(z) := \frac{\pi \cos \pi z}{\sin \pi z} \quad (\pi \cot \pi z \text{ とも書かれる})$$

とおく。分母、分子はいずれも \mathbb{C} 全体で正則である。分母 $\sin \pi z$ の零点は $n = 0, \pm 1, \pm 2, \dots$ であり、その位数は 1 である。ゆえに、これらは $s_1(z), s_2(z)$ の 1 位の極であり、留数は

$$\operatorname{Res}(s_1; n) = \frac{\pi}{(\sin \pi z)'} \Big|_{z=n} = (-1)^n, \quad \operatorname{Res}(s_2; n) = \frac{\pi \cos \pi z}{(\sin \pi z)'} \Big|_{z=n} = 1 \quad (n \in \mathbb{Z}).$$

s_1, s_2 を指数関数を用いて表すと

$$s_1(z) = \frac{2\pi i}{e^{i\pi z} - e^{-i\pi z}}, \quad s_2(z) = \pi \frac{2i(e^{i\pi z} + e^{-i\pi z})}{2(e^{i\pi z} - e^{-i\pi z})} = i\pi \frac{1 + e^{-2\pi iz}}{1 - e^{-2\pi iz}}.$$

これから、 $x = \operatorname{Re} z, y = \operatorname{Im} z$ とするとき、次の評価が得られる (すぐ後の積分の評価で必要になる)。

$$(5) \quad |y| = N + 1/2 \Rightarrow |s_1(z)| \leq 2\pi e^{-\pi N}, \quad |s_2(z)| \leq 2\pi,$$

$$(6) \quad |x| = N + 1/2 \Rightarrow |s_1(z)| \leq \frac{\pi}{\cosh \pi y} \leq \pi, \quad |s_2(z)| \leq \pi |\tanh \pi y| \leq \pi.$$

特に、任意の自然数 N に対して、 $R := N + 1/2$ として、 $\pm R \pm iR$ を 4 頂点とする正方形の周を正の向きに一周する曲線を Γ_N とすると、

$$(7) \quad z \in \Gamma_N \Rightarrow |s_1(z)| \leq 2\pi, \quad |s_2(z)| \leq 2\pi.$$

4. (1) $f(z) := \frac{1}{z^2 + 1}$ は、命題 0.2 の条件を満たす。また f は偶関数であるから、

$$\sum_{n=-\infty}^{\infty} f(n) = \sum_{n=1}^{\infty} f(-n) + f(0) + \sum_{n=1}^{\infty} f(n) = S + \frac{1}{1} + S = 2S + 1.$$

f の極は $\pm i$ で、分母の 1 位の零点であるから、

$$\operatorname{Res}(f; i) = \frac{1}{2z} \Big|_{z=i} = \frac{1}{2i} = -\frac{i}{2}, \quad \operatorname{Res}(f; -i) = \frac{1}{2z} \Big|_{z=-i} = \frac{1}{-2i} = \frac{i}{2}.$$

命題 0.2 より

$$\begin{aligned} \sum_{n=-\infty}^{\infty} f(n) &= -(\operatorname{Res}(f s_2; i) + \operatorname{Res}(f s_2; -i)) \\ &= -(\operatorname{Res}(f; i) s_2(i) + \operatorname{Res}(f; -i) s_2(-i)) \\ &= -\left[-\frac{i}{2} \cdot \pi \cot(i\pi) + \frac{i}{2} \cdot \pi \cot(-i\pi)\right] \\ &= \pi i \cot(i\pi) = \pi i \cdot (-i) \coth(\pi) = \pi \coth \pi. \end{aligned}$$

ゆえに

$$S = \frac{1}{2}(\pi \coth \pi - 1). \blacksquare$$

(2)

$$I = \int_0^{\infty} \frac{dx}{x^3 + 1}.$$

$z^3 + 1 = 0$ の根は $z = e^{\pi i/3}, e^{\pi i}, e^{5\pi i/3}$ であるから、

$$I = - \sum_{c \in \mathbb{C} \setminus [0, \infty)} \operatorname{Res} \left(\frac{\log z}{z^3 + 1}; c \right) = - \sum_{c = e^{\pi i/3}, e^{\pi i}, e^{5\pi i/3}} \operatorname{Res} \left(\frac{\log z}{z^3 + 1}; c \right).$$

$c = e^{\pi i/3}, e^{\pi i}, e^{5\pi i/3}$ のとき、 $c^3 = -1$ であるから、

$$\operatorname{Res} \left(\frac{\log z}{z^3 + 1}; c \right) = \frac{\log z}{(z^3 + 1)'} \Big|_{z=c} = \frac{\log z}{3z^2} \Big|_{z=c} = -\frac{z \log z}{3} \Big|_{z=c}.$$

ゆえに

$$\begin{aligned} I &= \frac{1}{3} (z \log z|_{z=e^{\pi i/3}} + z \log z|_{z=e^{\pi i}} + z \log z|_{z=e^{5\pi i/3}}) \\ &= \frac{1}{3} \left(\frac{1 + \sqrt{3}i}{2} \cdot \frac{\pi}{3}i + (-1) \cdot \pi i + \frac{1 - \sqrt{3}i}{2} \cdot \frac{5}{3}\pi i \right) = \frac{2\sqrt{3}\pi}{9}. \blacksquare \end{aligned}$$

5. C は D 内の区分的に滑らかな単純閉曲線で、 C が囲む領域内 Ω では f は正則で、 $[a, b] \subset \Omega$ とする。任意の $x \in [a, b]$ に対して、Cauchy の積分公式から

$$f(x) = \frac{1}{2\pi i} \int_C \frac{f(z)}{z - x} dz.$$

ゆえに

$$I = \int_a^b \left(\frac{1}{2\pi i} \int_C \frac{f(z)}{z - x} dz \right) dx = \frac{1}{2\pi i} \int_C \left(\int_a^b \frac{dx}{z - x} \right) f(z) dz.$$

(積分は、実軸上の閉区間の直積上の連続関数の積分であるから、積分順序の交換が出来る。) ゆえに

$$\Phi(z) := \int_a^b \frac{dx}{z - x}$$

とすれば、 $I = \frac{1}{2\pi i} \int_C \Phi(z) f(z) dz$ が成り立つ。Log を対数関数の主値として、

$$\Phi(z) = \operatorname{Log} \frac{z - a}{z - b}.$$

これは $\mathbb{C} \setminus [a, b]$ で正則である。

一方、

$$I_n = \sum_{k=1}^n \left(\frac{1}{2\pi i} \int_C \frac{f(z)}{z - x_k} \right) A_k = \frac{1}{2\pi i} \int_C \sum_{k=1}^n \frac{A_k}{z - x_k} f(z) dz.$$

ゆえに

$$\Lambda_n(z) := \sum_{k=1}^n \frac{A_k}{z - x_k}$$

とすれば、 $I_n = \frac{1}{2\pi i} \int_C \Lambda_n(z) f(z) dz$. この Λ_n は $\mathbb{C} \setminus \{x_k \mid k = 1, \dots, N\}$ で正則である。■

6. 流体の速度を $\mathbf{v}(\mathbf{x}, t)$, 密度を $\rho(\mathbf{x}, t)$ とするとき

$$(8) \quad \frac{\partial \rho}{\partial t} + \operatorname{div}(\rho \mathbf{v}) = 0.$$

が成り立つ。これを連続の方程式という。

証明 流体の質量が保存されるので、任意の領域 V 内の流体の質量の変化は、 V の境界から出入りする質量に等しい。

$$(9) \quad \frac{d}{dt} \int_V \rho dx = - \int_{\partial V} \rho \mathbf{v} \cdot \mathbf{n} d\sigma.$$

左辺に微分と積分の順序交換、右辺に Gauss の発散定理¹を用いて

$$\int_V \frac{\partial \rho}{\partial t} dx = - \int_V \operatorname{div}(\rho \mathbf{v}) dx.$$

これが任意の V について成り立つことから、(8) を得る。■

7.

(1) 流体の速度場を $\mathbf{v}(\mathbf{x}, t)$ とするとき、

$$\frac{D}{Dt} := \frac{\partial}{\partial t} + \mathbf{v} \cdot \nabla$$

で定義される微分作用素 $\frac{D}{Dt}$ を Lagrange 微分 (物質微分) と呼ぶ。流体の流れに沿って運動する粒子の、時刻 t での位置を $\mathbf{x}(t)$ とするとき、任意の関数 $f(\mathbf{x}, t)$ に対して

$$\frac{d}{dt} f(\mathbf{x}(t), t) = \sum_{j=1}^3 \frac{\partial f}{\partial x_j} \dot{x}_j(t) + \frac{\partial f}{\partial t} = \frac{\partial f}{\partial t} + \dot{\mathbf{x}}(t) \cdot \nabla f = \frac{\partial f}{\partial t} + \mathbf{v} \cdot \nabla f = \frac{Df}{Dt}.$$

つまり、 $\frac{Df}{Dt}$ は、流体粒子の流れに沿って移動したときの、 f の時間変化率を表す。

(2) Navier-Stokes 方程式は

$$\frac{\partial \mathbf{v}}{\partial t} + (\mathbf{v} \cdot \nabla) \mathbf{v} = -\frac{1}{\rho} \nabla p + \nu \Delta \mathbf{v}.$$

Euler 方程式は、粘性項を無視したもので、

$$\frac{\partial \mathbf{v}}{\partial t} + (\mathbf{v} \cdot \nabla) \mathbf{v} = -\frac{1}{\rho} \nabla p.$$

¹細かい仮定は省略する。 $\int_{\partial V} \mathbf{f} \cdot \mathbf{n} d\sigma = \int_V \operatorname{div} \mathbf{f} dx$.

(3) g を重力加速度として、 $\mathbf{f} = \begin{pmatrix} 0 \\ 0 \\ -g \end{pmatrix}$ となる。静止しているということは $\mathbf{v}(\mathbf{x}, t) \equiv \mathbf{0}$ ということであるから、Navier-Stokes 方程式は、

$$\mathbf{0} = -\frac{1}{\rho} \nabla p + \mathbf{f},$$

すなわち

$$0 = -\frac{p_x}{\rho}, \quad 0 = -\frac{p_y}{\rho}, \quad 0 = -\frac{p_z}{\rho} - g.$$

これから $p(x, y, z) = -gz + F(t)$. 水面を $z = 0$ として、 $F(t)$ を大気圧 $p_{\text{大気}}$ にすると、

$$p(x, y, z) = p_{\text{大気}} - gz. \blacksquare$$

8.

(1) (a) つねに $\text{div } \mathbf{v} = 0$ が成り立つとき、非圧縮であるという。(b) つねに $\text{rot } \mathbf{v} = \mathbf{0}$ が成り立つとき、渦なしであるという。(c) $\text{grad } \phi = \mathbf{v}$ を満たす ϕ が存在するとき、 ϕ を速度ポテンシャルという。(d) 曲線 $\varphi: I \rightarrow \Omega$ で、その接線ベクトルが、その点の速度と平行である $\varphi'(t) \parallel \mathbf{v}(\varphi(t), t)$ であるものを流線という。(e) $\mathbf{v}(\mathbf{x}, t) = (u(x, y, t), v(x, y, t))$ とする。 $\psi(x, y, t)$ が流れ関数であるとは、 $\psi_x = -v, \psi_y = u$ を満たすことをいう。

(2) ベクトル解析で次の定理を学んだ。

単連結領域 Ω 内のベクトル場 $\mathbf{f} = (f_1, \dots, f_n)^T$ が、 $\frac{\partial f_i}{\partial x_j} = \frac{\partial f_j}{\partial x_i}$ を満たし、 $a \in \Omega$ とする。 Ω 内の任意の点 \mathbf{x} に対して、始点が a 、終点が \mathbf{x} である Ω 内の曲線 $C_{\mathbf{x}}$ を取ると、 $\int_{C_{\mathbf{x}}} \mathbf{f} \cdot d\mathbf{r}$ は $C_{\mathbf{x}}$ の取り方に依らずに定まり、 $F(\mathbf{x}) := \int_{C_{\mathbf{x}}} \mathbf{f} \cdot d\mathbf{r}$ は $\text{grad } F = \mathbf{v}$ を満たす。

(a) 3次元の流体の速度場 $\mathbf{v} = \begin{pmatrix} v_1 \\ v_2 \\ v_3 \end{pmatrix}$ に対して、

$$\text{rot } \mathbf{v} = \begin{pmatrix} \frac{\partial v_3}{\partial x_2} - \frac{\partial v_2}{\partial x_3} \\ \frac{\partial v_1}{\partial x_3} - \frac{\partial v_3}{\partial x_1} \\ \frac{\partial v_2}{\partial x_1} - \frac{\partial v_1}{\partial x_2} \end{pmatrix}$$

であるから、 $\text{rot } \mathbf{v} = \mathbf{0}$ であれば、上の定理の仮定が成り立つ。

$$\phi(\mathbf{x}, t) := \int_{C_{\mathbf{x}}} \mathbf{v}(\cdot, t) \cdot d\mathbf{r}$$

は $C_{\mathbf{x}}$ の取り方に依らずに定まり、 $\text{grad } \phi = \mathbf{v}(\cdot, t)$ を満たす。すなわち ϕ が \mathbf{v} の速度ポテンシャルである。

(b) 2次元の流体の速度場 $\mathbf{v} = \mathbf{v}(x, y, t) = \begin{pmatrix} u(x, y, t) \\ v(x, y, t) \end{pmatrix}$ に対して、

$$\text{div } \mathbf{v} = \frac{\partial u}{\partial x} + \frac{\partial v}{\partial y}$$

である。そこで $\mathbf{f} = (f_1, f_2)^T := (-v, u)^T$ とおくと、

$$\frac{\partial f_1}{\partial x_2} = \frac{\partial f_1}{\partial y} = -\frac{\partial v}{\partial y} = \frac{\partial u}{\partial x} = \frac{\partial f_2}{\partial x_1}.$$

ゆえに f に対して、上の定理の仮定が成り立つ。

$$\psi(\mathbf{x}, t) := \int_{C_{\mathbf{x}}} \mathbf{f}(\cdot, t) \cdot d\mathbf{r} = \int_{C_{\mathbf{x}}} f_1 dx_1 + f_2 dx_2 = \int_{C_{\mathbf{x}}} (-v dx + u dy)$$

は $C_{\mathbf{x}}$ の取り方によらずに定まり、とおくと、

$$\psi_x = -v, \quad \psi_y = u.$$

(3) 2次元の非圧縮渦なしの流れ $\mathbf{v} = (u, v)^T$ があるとき、速度ポテンシャル ϕ と、流れ関数 ψ が存在する。

$$\phi_x = u, \quad \phi_y = v, \quad \psi_x = -v, \quad \psi_y = u$$

であるから、

$$\phi_x = \psi_y, \quad \phi_y = -\psi_x.$$

これは Cauchy-Riemann 方程式であるから、 $f(x + iy) := \phi(x, y) + i\psi(x, y)$ で定めた f は正則な関数である。この f を \mathbf{v} の複素速度ポテンシャルという。 $f' = f_x = \phi_x + i\psi_x = u - iv$ が成り立つ。 ■